

## 福井人絹取引所の設立

清 水 葉 子

本稿執筆時点で、新型コロナウイルス感染は第七波が到来しているとされ、全国で二〇万人を超える感染数を見えています。私たちは、一年以上にわたって人との接触を抑制しながら日常生活を送っており、生活様式の大きな変化に余儀なく適応せざるを得ません。

コロナ禍での生活の功罪については多くの専門家が所見を述べ、また私たち一般のものも諸々の雑感を持っているところですが、そうした中でも、地方が改めて見直されたり、自分の暮らす土地に以前より濃密な目を向けるようになったりし

ていることは悪いことではないと感じます。遠くまで外出する代わりに、自宅周辺の散歩から新しい発見を得ることも少なくありません。

二十年来、私が住んでいる福井県でも、東京と結ぶ飛行機が減便され、名古屋、大阪など都市部とつながる特急列車の本数も減ってしまいました。が、その代わり、北陸という地域に新鮮な気持ちで関心を持つようになりました。

福井県は、周知の通り有数の繊維産業の集積地です。人口あたりの繊維工業の年間出荷額が三一万五〇〇〇円と、全国平均の三万円を大きく上

回つて一位、福井県の製造業の中で繊維工業に従事する人の割合は二〇%、福井県の製造品出荷額で見ても、電子デバイス一五%、化学一一%に次いで、繊維一〇%と大きな割合を占めています。

また、全国に占めるシェアで見ると、ビスコース人絹織物の八三・一%を筆頭に、多くの繊維製品で全国シェア一位を占めています（二〇二〇年工業統計表）。現代の福井県の繊維産業は、衣料品から、より付加価値の高い産業・工業分野向け繊維製品に比重を移しているのも大きな特徴です。

福井県は、古くは江戸時代から奉書袖と呼ばれる純白の絹織物が有名で、紋付などに使われていたとされます。明治期に入つて、群馬県の桐生から、稠密な平織の絹織物である羽二重の技術が伝えられ、福井県内に広まりました。羽二重は、明治から大正にかけて輸出が大きく拡大し、海外で夜会用手袋、ストール、シルクハットなどに用い

られました。輸出用の羽二重は薄手に織られており、現在でも着物の裏（胴裏）などに用いられるようです。

一九〇三年（明治三六）には福井県の絹織物の生産シェアが全国一位となり、輸出のピークを第一次大戦後の一九一八年（大正七）に迎えますが、その後は関税障壁や、金融恐慌などに苦しんで不況に陥ります。輸出も含めた福井県の絹織物生産額は一九二〇年に一億九七六万円を記録しますが、これ以降は減少し、一九二七年（昭和二）には七〇七一万円にまで落ち込んでしまいました。絹織物生産の大部分を占めた輸向けの高値落ち込みが四三・一%と極めて大きかったとされます。

羽二重を中心とした絹織物に代わつて、急激に勃興したのが、人絹（レーヨン）です。

木材パルプなどを原料とする化学繊維である人

絹は、山形県が発祥とされますが、福井県では縦糸に綿糸、緯糸に人絹を用いた交織として試織され、まもなく経糸、緯糸共に人絹を用いた雙人絹織物が生産されるようになり、輸出入の人絹織物が記録されるのは一九二四年（大正一三）からです。人絹は、当初は絹の代用品として低く見られました。品質が向上するにつれ、後に絹と人絹を並べてどちらが正絹であるか見分けがつかないと言われるようになります。

福井県では、一九三〇年（昭和五）には絹織物の生産量を人絹織物が追い越し、人絹織物で全国一位の産地となるに至ります。安価な人絹織物の輸出が増加したことはもちろんですが、もともと福井が得意とした絹織物と同じ長繊維であったことも、順調な拡大の理由と考えられています。繊維は、綿、麻、羊毛などの短繊維と、天然繊維でただひとつ長繊維である絹、および人絹・ポリエ

ステルなど長繊維である化学繊維とは、紡ぐ、織るといった工程に違いがあるため、同じ長繊維である絹織物産業で培った技術特性を人絹織物に引き継ぐことができたのでしょう。

人絹織物の生産拡大にもなつて、織物の原料である人絹糸の取引も活発化します。福井は、羽二重の全盛期から織物の原材料である生糸の需要地域であり、原糸取引が活発でしたが、人絹織物の時代になると、人絹糸の入荷が全国の生産高の五割強に達し、福井が人絹糸市場の標準とされるようになりました。

人絹糸の取引の拡大は、実需に加えて、投機的な取引も呼び込むようになります。福井での人絹糸の取引は、通常の現物取引や、期限を決めて一定数量を順次受け渡しする順次取引の他に、オツパ取引と言われる一種の先渡取引が行われていました。オツパ取引は、約定期間中にいつでも現物

を引き渡しできる売り手勝手渡ししの取引として行われ、証拠金も不要であったとされます。オツパの語源は、約定期月中に売り手側はいつでも人絹糸の現物を受け渡して良いということから、売り手側の「オツ放し」であるとする説明や、相場用語で「オツパル」、すなわち「いくらオツパッタ」などという通俗語から来ているとする説明、また、福井方言で「やり放し」という意味で「オツパッパ」という言葉がもたになっているとするもの、三説が紹介されています。

オツパ取引を行うことができるのは、福井レーヨン商組合の組合員に限られており、組合員は設立当時三六人であったものが、オツパ取引の興隆にともなって大阪、京都の原糸商が福井に店舗や支店を設けて組合に加入したとされています。

実際の取引は、組合員の間にはブローカーが仲介しますが、こうしたブローカーの出自は、絹紬ブ

ローカーのほか、問屋の丁稚上がりのものも多く、自転車一つを資本に売り手と買い手の間を走り回ったとされます。丁稚が一人前になると、店から暇をもらってブローカーとして独立するので、問屋筋では店員が払底したこともあったようです。

取引が盛んであった福井市佐佳枝中町（現在の福井市順化）の一角はオツパ街と呼ばれ、またそのすぐ南側の浜町周辺は花街としてたいへん賑やかであったと伝わっています。現在の福井市順化周辺は、片町と呼ばれる飲食店が軒を連ねる街並みとなっているほか、浜町周辺も高級料亭が多く、往時の面影を残しています。

福井出身の作家、津村節子の作品に往時のオツパ取引が登場する記述があり、絹織物から人絹織物への移行期にあたると思われる頃の福井の様子を生き生きと伝えています。

私の父は、私が生まれた頃福井市内の中心部にあった織物商社街に店を持ち、勝山の大手機

業の福井出張所も預かっていた。福井県の絹織物は、日本の経済を支える輸出三本の柱、と小学校の教科書でも習い、羽二重王国を誇っていたが、一九二六年（昭和元）に人絹織物に移行し、一九三一年には、全国生産の六割を占めた。福井人絹取引所が開かれると、全国人絹糸生産額の三分の二に至り、東京、大阪は福井人絹取引所の相場を標準にするようになった。

一方では、従来と同じ高級羽二重、双子織、縮緬、塩瀬、デシンなどの生産も盛んに行われていて、福井織物のブームと言われた昭和六、七年には、生糸や人絹糸が商社街の店頭に山積みされ、その間に机を出して事務をとったほどである。オツパ取引（仲間取引）が締切りになる午後四時前には、大八車が轍の音高く街を

走り廻っていた。（福井の織物）。

こうした活況の一方で、オツパ取引は投機的な性格を持ち、問題視もされました。この取引の性格は、相対で行う先渡取引と見ることができずから、将来の価格が上がると予想すれば価格が安いうちに買う契約をし、下がると思えば価格が高いうちに売る契約をすれば、将来の価格変動をヘッジすることができます。とはいえ、こうした思惑が当たるとは限りませんので、予想と反対に価格が動く損失が発生します。

また、証拠金が不要であることから、実需をともなわず思惑によって大量の売買を繰り返すことが容易で、差金決済を行っていたと考えられます。このため、十分な資金を持たない者や人絹糸の現物を保有しない者が、資力以上の投機的な売買をして破産につながることも少なくなかったよ

うです。また、大きな資本を持つ商人が、買い占めや売崩しをして、相場を人為的に変動させるという弊害もあったとされます。

オツパ取引について、記録に残っている数字を見てみましょう。一九三一年（昭和六）上半期の福井市場の人絹糸取引数量は一二万梱で、そのうちオツパ取引によるものは七一・一%を占めており、また、オツパ取引での標準銘柄とされた帝国人絹岩国工場製品の一〇〇デニール糸が現物として入荷したのはわずかに一万八〇〇〇梱であったので、全取引の中で現物をとまなつたのは二・一%に過ぎないことが分かります。現物が非常にわずかしかないことから、ほとんどの取引は現物の受け渡しをとまわず、差金決済をしていたと推察できます（『福井県史』通史編6 近現代二）。

また、前出の『福井県史』には、オツパ取引での訴訟が二例紹介されています。二例とも、糸の

需要家であるはずの機織業家が人絹糸の売り手となり、人絹糸を機織業家に売るはずの間屋が買い手となっています。限月を決めて売買契約をしますが、機織業家の思惑とは逆に人絹糸の価格が高騰してしまい、期限が来ても糸を受け渡すことができず、差金決済もできなくなっている事例です。機織業家が実際に使用する糸の量に比べて桁違いに大きな売買契約が結ばれていることから、取引が実需に基づくものではなく投機的な性格を持っていることが明らかです。

また、オツパ取引を行うことができるのは福井レーヨン商組合員に限定されているはずのところ、二例のうちの一つでは、取引の片方は組合員ではなく、別の組合員方で取引がなされたとされており、組合員に委託した形で非組合員が取引をしていたこともうかがえます。二例のうち一方は判決結果が不明とされていますが、残る一例で

は、「一般の法的見地から見れば賭博に類する行為で良俗に反する」とされたと報道されています。

このように極めて投機的性格の強い取引を放置しておく、市場不安を招き、またせっかく発展した福井産地の危機につながるとして、一九三一年（昭和六）に、福井レーヨン商組合の総会で人絹取引所の設立が提案されました。取引所の設立によって、組織化された取引の場を作り、投機を抑制するという目的があったと思われる。当時の取引所は、株式会社組織と会員組織の両方が認められていましたが、福井人絹取引所は会員組織として設立することとなり、必要な三十人以上の発起人を集めて発起人総会を開くに至ります。

この時期には、福井より先に東京米穀商品取引所、大阪三品取引所でも、人絹の追加上場を申請していたため、三つの取引所が請願、陳情合戦を

繰り広げたようです。結果としては、福井人絹取引所への人絹糸の上場が最初に認められ、福井は世界でも初めての人絹取引所を持つことになりました。福井は大きな織物産地を控えた人絹糸の需要地であって、すでに福井相場が全国の標準になっていたことに加え、商工省がオツパ取引に強い関心を抱いたことなども理由の一つだったかもしれません。

三取引所による競争が激しいので、商工省取引課に、活発な請願がうるさいことを面白く書き立てた「人絹行進曲」なる落書きが貼り出されたという面白いエピソードも残っています。

福井人絹取引所は、一九三二年（昭和七）五月十四日に開業式が行われ、撃柝の音を合図に立会が開始されます。開所時は、福井県生糸検査所の建物の一部を借りていましたが、のちの一九三七年には、福井市佐佳枝中町に福井人絹会館を設立

し、取引所立会場に加え、談話室や応接室、食堂、撞球室等を備えた近代建築に移ります。

人絹取引所の設立後も、人絹糸の場外取引は行われていたようですが、オツパ取引よりも順次取引が中心になり、投機的取引の抑制には一定の効果があったようです。

福井の人絹糸、人絹織物は、戦時の生産統制の最中の一九三七年（昭和一二）に検査高（出荷）のピークを迎えますが、その後は減少し、それともなつて人絹取引所での売買高も急速に減少します。一九三八年には、人絹糸に公定価格を採用することが定められ、取引所は価格形成という機能を失っていきます。当時の取引所の認可は一年の期限付きで、継続には改めて出願が必要でしたが、取引が事実上休止していることから、戦前の福井人絹取引所は出願を断念し、一九四二年に解散を選択します。ここまでは、福井に世界初の

人絹取引所が設立されるまでの経緯です。

戦後の福井人絹取引所は、一九四七年（昭和二二）から本格的に再開し、翌一九四八年には福井大震災によって被害を受けますが、一九五〇年からの朝鮮特需によってガチャ万と言われる好況を経験します。その後は、人絹から化学・合成繊維の時代に移り、ナイロン織物、ポリエステル加工糸織物が成長して、人絹を代替するようになります。一九七〇年代のオイルショック以降は、韓国や台湾の繊維産業の成長を受けて、繊維産業における大量生産の時代は終焉を迎えます。戦後に再開した人絹取引所は、一九七四年に解散し、戦前七年、戦後二十四年の歴史に幕を下ろすことになりました。

福井人絹取引所の入っていた人絹会館は、老朽化のため一九八四年に取り壊され、古い写真で往時を偲ぶしかありませんが、福井県歴史博物館の

一部に人絹会館をモデルにしたゾーンがあり、昭和初期のモダンな建築や装飾を目にすることができま

す。福井は、その後も長繊維である合成繊維関係の産業を発展させ、現在でも衣料品にとどまらず、産業資材としての繊維製品、染色等の分野で大きな地位を占めて今日に至ります。繊維産業は、繊維の加工や織物機械を起点に、化学工業、機械工業等にも派生し、現在の福井の産業を支えています。

今となつては地元福井でも忘れられがちな人絹取引所設立当時の熱意は、時間が経つてみると人絹ブームの徒花のように見えなくもありませんが、現代の福井の産業や街並みに確実に足跡を残しています。

(参考文献)

- 黄孝春「戦後における繊維流通と『取引所問題』」  
木村亮「福井人絹織物産地の確立過程」  
小林和子「戦時取引所東郷から平時統合まで―取引所設立・解散政策の動と静」  
齊藤健人「戦間期における福井県織物業の動向とその構造変化―『福井縣統計書』の分析―」  
田口直樹「北陸地域産業の展開過程に関する考察」  
田村正夫「北陸における明治前期の繊維産業―織物業を中心に」  
津村節子「似ない者夫婦」 「福井の織物」  
『福井県史』通史編 福井県文書館 デジタル歴史情報  
『図説 福井県史』 福井県文書館 デジタル歴史情報  
『福井人絹取引所通史』 福井人絹倶楽部  
福井新聞 各号

(しみず よつこ) 福井県立大学経済学部教授  
当研究所客員研究員